



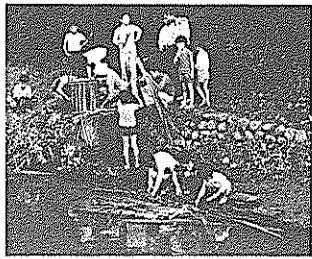
分の気に入るように作り上げるのもいいんです」「この庭も自分の山から石をとってきて私がつきました」美しい花を咲かせるために消毒や肥料のやり方には気をつけているそうだ。

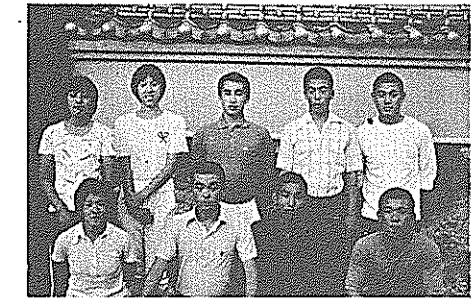
「来年もまた咲かせてお目にかけてますよ」と手入れの手を休めて語ってくれた。

エンコウまつり

「エンコウに足を引っぱられて水の中に引っぱり込まれる」

今年も水の季節を迎え、前浜では「エンコウまつり」が行なわれた。子供たちが川岸にシヨウブで祭壇を作って、「今年も水の事故がないように……」とエンコウの好きなきゅうりをそえてねんころに祭った。





県立高知農業高等学校陸上部の強さは定評のあるところ。その陸上部で練習にはげんでいる市外から来ている生徒たちが立田で寮生活を送っている。総数二十九名。

「毎朝六時半頃、バス停の掃除をするんですよ。道で遇っても、こんにちは」と挨拶してくれそうです。近所の人でも挨拶しないこともありません。ほんとに、すがすがしい。

さわやかな仲間たち

農業高校陸上部寮生活

寮生活は楽しい」というのが全寮一致の意見。はくたが寮に入った時は、先輩の陸上部はたいへん強かった。はじめはオンチャンみたいで恐かったけれども、慣れるといろんなことも相談した。というのは中村市から来ている上岡充君。

「当初は家が恋しくって、こっそり蒲団の中で泣いたこともあった。女の子はなおさら……」。つぶやくように言った言葉の端に確かな思いやりがこもっていた。

目標は常に、シーズン前のタイムの向上と競技の成績においている。(このインタビューにに応じてくれた人の中で) 去年、女子でインターハイに出場したのが明神多江さん(室戸市)、菊池圭代さん(土佐清水市)、八木利津子さん(大月町) 太田越子さん(中村市)。

男子生徒で、印象に残っている競技を聞くと、「四百メートルでぶちこけたこと」。県ではいつも、「二番だ」という上岡君が言った。和田和久君(宿毛市)は全国駅伝に出場したことを、田中彰治君(宿毛市)は駅伝の苦しさを語った。競技へ出場の後には合同で「宴会」をする。反省をし、歌も出る。寮の歌姫は八木利津子さん。歌う曲は、小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」。「素晴らしい上手だ」が男性三人の一致した意見。人気者No.1は筒井美智さん(土佐町)。「とてもユーモアがある」が男性の筒井美智君だ。

学校の行事で楽しみなことも体育祭やクラスマッチのスポーツ。「練習で疲れるでしょう。お母ちゃん、お母ちゃん、足がはって走れんよ」(笑い)。そんな寝言が聞かれるという。「こんにちは」と寝言で挨拶する者もいるとか。寝言で一番多いのが、陸上競技のこと、挨拶のこと、青春のエネルギーは、寝言の中でも躍動する。たまにはみんなで映画を見に行く。最近では「青春の門」へ。共通していえることは、その明るさ。手をとりあい、助け合っている様が目に見えるようだ。

も、真実イコール馬鹿さ加減といった方程式さえ作っているかに見える。でもほんとうに真実とは価値の低いものだろうか。少し哲学的になるが、「利」を考える前に「真」を見きわめる必要があるのではないかと思ふ。

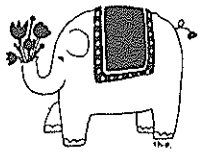
最近とみに深刻化しつつある地方財政の中で、市政はどう変化しているのだろうか。また、危機突破のために市民はどうすればよいのだろうか。そんな不安と焦燥の中で私は今「広報なんこく」の「やさしくてまじめな口」をあらためて考えと共に、市政の真実を知る教材として今後共限りなく愛し続けたいと思ふ。

(富二枝)

善意の箱

■山地勝洋 早苗さん(後免)は結婚式のウエディングケーキをやめて、その分を土佐希望の家、土佐清風園にそれぞれ一万円を贈りました。

■依光治水さん(上甘枝)から香典返しとして五万円が土佐希望の家へ贈られました。どうもありがと、ごさいました。



藤村さんの さつき盆栽



「最近さつきの盆栽がはやってきています」「私のはじめて今年で三年目です」ご自慢の庭をながめながら大浦の藤村高義さん(70)はいう。

先日、市役所の玄関に見事なさつきの盆栽を展示してくれたのがこの人。

高義さんところの庭にはさつきをはじめ五葉松などの盆栽がたくさんある。「前からこんなことが好きだった」自

あなたがつくるпейジ

南国歌壇

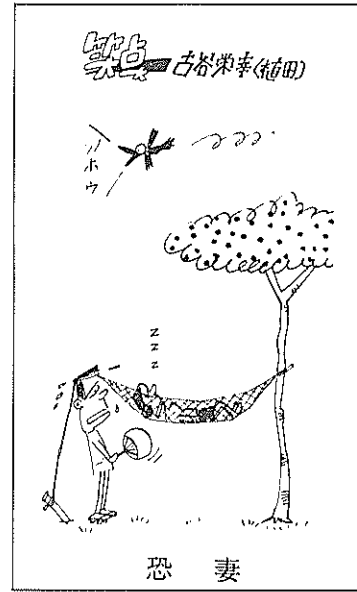
やはらげく露の露たつ庭の土靴につけて故郷にほう
北永田 島田美津子
我がめぐり紫陽花のみが浴え湧えと 花いろ変ふる霖雨の日々を
西野田 吉川定子
寄添ひて生きつつ寂し夫の膝に 貼りし湿布の今宵も匂ふ

大浦 上東奈賀子
哀情は固執となりて渴きつつ 埋め尽さん温もり欲しし
植野 永野美由
白百合をいける今の一刻が 吾が人生の最良のとき
鳥岩 島本栄

南国俳壇

紅つづび疑い深い猫の視線
次の餅さ待つ女郎蜘蛛の太文字
抜歯して原始の青葉しみ通る
邸内のほかに匂ふ花蜜柑
木もれ日に咲く紫陽花の色深み
御手洗の水のあふるる梅雨の宮
平氏の血燃やす御興を揉みあひて
毛虫這ふ不動明王の手のひらを
新緑を鏡にもらい梳る

若草句会 馬場左枝
高村三喜子
公文政子
西川とみ子
鈴江妃世
竹田明代
田村一翠
岡田静子
浜田豊子



恐妻

鏡台

詩

私にもかつて鏡台があった
立派な桑の木姿見……。
それは子供だった私を
娘になった私を
いつもやさしくうつしていた
鏡の中の私は
ある時は美しくある時は悲しく
娘の心がうつっていた
ふさふさした髪を
くでに編んだ頃から
やがて私は長い長い髪を
ぱつぱり切つてパーマをかけた
あら、そんなことしていいのと
鏡は目を丸くした
戦時中の私はパーマをやめて
もとのおさげ髪になって
いつもお勤めに忙しかった
そしてとうとう戦火で
家は焼けたの
あの立派な鏡台は燃えるとき
どんなにあつくと泣いただろう
私の愛した鏡台よ
私の娘時代を知っている鏡台よ

刈谷益子
(後免町)

広報委員の目



真実

紙面の都合で全詩を紹介出来なくて残念であるが、私の好きなアンリイ・ド・レニエ作の「若しも私が」の詩の後半に

若しも私が
心から愛したとすれば
それはお前の
やさしくまじめな口だ
一行がある。恋愛歌であるこの詩を、しかもほんの部分的に引用するのは、まったくもって適切でないが、私は詩中の「お前のやさしくまじめな口だ」の一行に好感を覚えて好きである。

現代人は聡明で計算性に富んでいる。過去に高く評価されていた「まじめだ」とか「真実」だとかの言葉は現代社会の中ではその価値は低下する一方である。人は皆、真実を語る事を恐れ、いやそれより